

古田和子・太田淳編『アジア経済史』（上下、岩波書店、2024-25年）書評会

2025年12月20日

小林篤史「アジア経済史研究から」

### 報告要旨

本報告は、古田・太田編『アジア経済史』上下巻を、日本の学界におけるアジア経済史研究の展開の中に位置づけ、その学術的意義と今後の課題を検討する。1980年代以降、日本の経済史学界では「アジア交易圏論」と称される一連の研究が、アジア独自の交易網、商業金融秩序、生産技術と消費文化に着目し、欧米主導の近代化像を相対化する新たな歴史認識を提示した。こうした研究潮流は、アジアの経済発展を外生的要因ではなく内生的変容として捉え直し、地域横断的な連関構造と長期的視野に基づく「アジア経済史」という研究領域の成立を導いた。

本書『アジア経済史』はこの研究史的蓄積を踏まえつつ、従来の市場・国家・制度といった経済史研究の対象に、自然環境・人口動態・物質文化という基底要因を統合し、アジア経済を多面的・総合的な歴史過程として再構成している点に大きな意義がある。とりわけ、近世・近代・現代を单一の時間軸で捉え直す構成は、戦間期から戦後成長への連続性という未解決の課題を明示するとともに、アジア経済史の時代区分そのものを再考させる契機となる。また、域内の商人ネットワークや中継港・交易体制を広域的な経済連関として位置づけ、アジア内部の多様性と市場統合の歴史的展開を体系的に提示している。

一方で、本書が提示するアジアにおける「市場経済」の長期的発展の理解を深化させるためには、アジア内の地域差を比較史的に精緻化すること、西洋経済史との比較を進めること、さらに計量経済史研究と向き合うことが今後の課題として残る。これらの論点は、本書がアジア経済を長期かつ総合的に描いたことによって、改めて明確化された課題でもある。以上より、本書はアジア経済史研究の新たな基盤を提示すると同時に、次なる研究展開に向けた重要な論点を投げかける成果である。